

Title	Vādhūla-Śrautasūtra新写本に基づくVājapeya祭の研究
Author(s)	坪田, さより
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/96152">https://hdl.handle.net/11094/96152</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

氏 名 ( 坪 田 さ よ り )	
論文題名	Vādhūla-Śrautasūtra新写本に基づくVājapeya祭の研究
論文内容の要旨	
<p>Vājapeya (vājapeya-) は特定の祭式を表す固有名である。Vājapeyaにおいては、興奮作用のある植物の搾り汁 (soma-) の压榨・献供・共飲を中心とするソーマ祭 (動物犠牲と穀物儀礼も含む) に加え、独自の追加要素として、昼の压榨時の戦車競走・祭柱登り・灌頂、さらにPrajāpatiへのソーマとスラーの準備・献供・共飲等が行われる。Vājapeyaは、ソーマ祭の基本型Agniṣṭomaを順次拡張し、独特の王権儀礼的要素を追加したものである。その規定を述べるVājapeya章もAgniṣṭoma章を前提としており、Vājapeya祭において新たに追加される規定のみを最小限記述する形式を採用。また、RājasūyaやAgnicayanaといった他の王権儀礼と重なる要素については、学派や文献の成立時期によって扱いが異なっているという問題がある。</p> <p>VādhŚSの成立時期は、Yajurveda系Śrautasūtraの中では言語的・思想的にBaudhŚSに次いで古い (ただしBaudhŚSのDvaidhasūtra部分よりは古い) と推測されており、すなわち、BaudhŚSと並んで、Śrautasūtraによる祭式整備の黎明段階に所属していると考えられる。実際に、VādhŚSが独自の (他の学派の文献に見られない) 解釈や手順を有することも稀ではない。以上のことを考え合わせると、VādhŚSのVājapeya章は、Vājapeyaのみならず王権儀礼の整備過程を窺い知る上で、適格な資料であると言える。</p> <p>VādhŚSが言語・思想史上古く、重要性が高いということは、すでにCalandによって指摘されていた (Caland, W. 1923 “Über das VādhŚ”, Acta Orientalia 1)。しかし、従来の研究で用いることができた写本 (M, *Mc, H, P) はいずれも、同一系統の写本の二次写本、しかも、原本の欠損に基づく広範なテキスト欠損を示す (井狩 2004, pp. 5-6)。こういった従来写本の質の低さは、本来の状態に近い読みやその再建を著しく妨げる。この根本的課題を打破すべく、井狩彌介氏 (現京都大学名誉教授) は、1990年以降、南インドにおいて調査を実施し、ケーララ州中部においてVādhūla派の新写本群を発見した。新写本群は、従来よりもはるかに質の高い (より原本に近い) ものを含んでおり、これ以降、Vādhūla派の新写本を用いた信頼性の高い研究が可能となった。</p> <p>本稿は、井狩氏により新写本の画像の提供を受け、(1) 未だ全容の明らかになっていないVādhūla派のVājapeya章 (VādhŚS IX) のテキストを校訂し、その内容を詳らかにすること、(2) その記述を、他のヴェーダ文献のパラレルと比較することにより、VādhŚS IXの言語的特徴や、インド思想史上の位置付けを明らかにすることを目的とする。結果として、以下のようなことが確認された。</p> <p>VādhŚS IXにおけるVājapeyaの特徴として、まず構成上の問題がある。Vājapeyaを特徴づける代表的な3儀礼、戦車競走・灌頂・祭柱登りについて：(1) VādhŚSおよび同様に古層のBaudhŚSでは競走と灌頂を祭柱登りに先行させるが、他のYV系統ŚS (: 中期のMānŚSと新層のĀpŚS, Hir°, Vaikh°, Vār°) では3儀礼の最後に灌頂を行う。(2) 第3 marutvatīya杯献供はVādhŚSでのみ3儀礼全てが終わった後にあり、他のŚSでは競走準備中に位置する。māhendra杯献供はVādhŚSでは3儀礼と直接連続しないが、他のŚSでは細分化され、3儀礼の進行に伴って順次行われていく。この差異はRājasūya章との関係において、今後のさらなる検討を要する。また、これに関連して、tārpya-などの「専用の衣等着用」の規定 (VādhŚS 9.2.1.2-4) は、Rājasūya章にある「専用の衣等着用」の規定と同一である。対して他の黒YV系統ŚSでは、同じマントラの詠唱、祭主のtārpya- (衣の一種) の着用以外に、VPとRājasūyaの規定が共通する点は無く、互いに異なる規定である。当規定は、他のYV系統ŚSでは祭柱登りの冒頭にあるが、VādhŚSでは競走準備冒頭、すなわち「戦車競走→灌頂→祭柱登り」という3儀礼の流れの先頭にある。このことから、VādhŚSは、「専用の衣等の着用」を、競走儀礼の開始というよりも、Vājapeyaを特徴づける3儀礼全体の開始を示すものとして意識していると推察される。</p> <p>また、文体の特徴として、他のŚrautasūtraに比べ、省略の少なさが際立っている。ソーマ祭本祭における動物犠牲祭 savanīyapaśuについて、AgniṣṭomaとVājapeyaとの大きな違いは犠牲獣の数である。Agniṣṭomaでは1頭、VādhŚSのVājapeyaにおいては22頭の犠牲獣が用いられる。犠牲獣の頭数に付随して、祭式道具 (vapāśrapaṇī-, barhiṣ-) の数も増加する</p>	

が、VādhŚSでは、Agniṣṭoma章（VādhŚS VI）あるいは犠牲祭章（VādhŚS V）から一つ一つその数だけが増えた規定を示している。新層のŚrautasūtraはもちろん、同じく古層であるBaudhŚS以上に丁寧あるいは冗長な記述となっている。

儀礼の内容については、他の文献には見られない独自の規定（マントラや手順）が見られる。特に興味深い事例を以下に二つ示す。

(1) VādhŚSのVājapeya本祭日には、madhugraha「蜜の杯」を汲んで、安置し、Brahman祭官が摂取するという一連の手順が為される。このような規定は他のYV系統ŚSには見られない。そもそもmadhugrahaを汲んで安置するのはVādhŚSとKātyŚSだけであり、VādhŚSはそれらの際にもマントラ（Agnicayana祭より借用したものと出典不明のもの）を規定する。通常のソーマ杯（graha）が神格に捧げる献供を目的として汲まれるのに対し、madhugrahaは両ŚSで献供されず、Brahman祭官の手に渡ることも注目される。なおmadhugrahaは、他の黒Yajurveda系統（VādhŚSが所属するとされる）のŚrautasūtraにおける黄金製（または銀製、MānŚS）の蜜の器（sthāla/pātra）等に相当すると思われる。Brahman祭官にmadhugraha（あるいは蜜の器）を与える背景には、「Brahman祭官にmadhugrahaを与えることで、madhugrahaの入った金の器に象徴される不死を、祭主が自分のものにする」とする白YajurvedaのŚatapatha-Brahmaṇaの影響が窺われる（ŚB 5.1.3.19; 5.1.5.28）。一方で、madhugrahaを摂取する行為と、その際のマントラはVādhŚS独自のものであり、白YVによる解釈をさらに推し進めていると考えられる。

(2) 本祭昼の戦車競走では、どの黒Yajurveda文献でもUjjiṭīと呼ばれるマントラ（あるいは詩節）が登場する。Taittirīya派（VādhŚSが所属するとされる）では、その内容は「（神格は～を）勝ち取った（imperfect 3sg. údajayat, 3du. údajayatām, 3pl. údajayan）」と、列挙していく形である。しかしVādhŚS（9.2.1.28; 9.3.1.12-13）では、このマントラの動詞の別の活用形を用いるよう指示する（ただしVādhŚSはUjjiṭīの呼称を用いない）。戦車競走の開始前には、祭主が「（神格は）勝ち取れ（imperative 3sg. ujjayatu, 3du. ujjayatām, 3pl. ujjayantu）」と唱えて金片（hiraṇyasaṅka-）を、（16人の）競走参加者に配布し、競走の終了後に金片を回収するときには、Adhvaryu祭官が「（神格は）今し方勝ち取った（aorist indicative 3sg. udajayiṣīt, 3du. udajayiṣtām, 3pl. udajayiṣur）」と唱えて献供する。このように祭式の現場での状況にマントラを適応させる操作（ūha-）は広く見られるものであるが、いわゆるUjjiṭīマントラに対してこれを行なうのはVādhŚSのみである。また、Ujjiṭīマントラと、金片配布・回収（他文献ではkṛṣṇala-が相当）は、他のŚrautasūtraでは別物として扱われている。VādhŚSは、おそらく黒Yajurveda系統のブラーフマナ（MS 1.11.5; KS 14.5; TB 1.3.2.5-6）に見られるUjjiṭīマントラの由来譚（PrajāpatiがVājapeyaの分け前として、神々にUjjiṭīを差し出した）を念頭に、Ujjiṭīマントラと金片の手続きを組み合わせるにより、祭主をPrajāpati、競走参加者たちを神々に見立て、競走儀礼の象徴性を浮き彫りにしようとしたと推測される。

以上のように、VādhŚS IXには、ブラーフマナに見られる解釈を、儀礼として具現化させようとする意図が明確に示されている。

VādhŚS IXの章末（VādhŚS 9.5.1-2）には、Vājapeya後に挙行されるべきとされる別の儀礼として、Pratyavarohaṇīyaが規定されている。Pratyavarohaṇīyaは、ブラーフマナ文献では言及されず、シュラウタースートラの中でも一部に名前が見られる。さらに、その詳細な規定はVādhŚS以外では述べられない。そのため、Pratyavarohaṇīyaの名前が出る用例の他に、ヴェーダ文献におけるその関連語・関連表現（apratyavarohin-「戻り降りを持たない者」等）の用例、さらにpraty-ava-roh/ruh「戻り降りる」の動詞の用例に調査範囲を広げた。

このような調査の結果、「戻り降りる」という表現がVājapeyaだけでなくその他の王権儀礼や、ソーマ祭の文脈で見られ、特にSattrāに関して多く見られることが分かった。また、「戻り降りる」という動作の具体的な側面（実際に高い位置から低い位置に降りることや、身分の高い者に対する表敬行為として座席等から降りること）と、象徴的な側面（天から地上への戻り降り）とを確認することができた。また、VādhŚSによるPratyavarohaṇīya祭の解説部分が、ヴェーダ文献に広く見られる、「祭式中に祭主が天界や別世界に行ったっきりになって、地上に戻って来られないのではないか」という不安を背景とし、その解決策としてPratyavarohaṇīyaを提示していることがわかった。このようなPratyavarohaṇīyaの説明は、VādhŚS独自のものと思われる。「天界から地上への帰還」という発想については、praty-ava-roh/ruhの用例に留まらない広がりがあるものと見られ、その研究を今後の課題としたい。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 坪田さより )	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 堂山 英次郎
	副 査 大阪大学 教授 辛 賢
	副 査 大阪大学 講師 名和 隆乾
	副 査 京都大学名誉教授 井狩 彌介
<b>論文審査の結果の要旨</b>	
以下、本文別紙	

## 論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： Vādhūla-Śrautasūtra 新写本に基づく Vājapeya 祭の研究

学位申請者 坪田さより

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	堂山 英次郎
副査	大阪大学教授	辛 賢
副査	大阪大学講師	名和 隆乾
副査	京都大学名誉教授	井狩 彌介

## 【論文内容の要旨】

本論文は、坪田さより氏が修士論文以来携わってきた古代インドの王権儀礼の一つ Vājapeya 祭（ヴァージャペーヤ祭；以下 VP 祭）の研究の集大成である。Vādhūla-Śrautasūtra（Vādhūla 学派の祭式手順書；以下 VādhŚS）の新発見写本の校訂研究を通して、VP 祭全般の問題や Vādhūla 学派の同祭における特徴や課題を、他学派・他文献との比較によって広く分析・考察したものである。A4 版で全 301 ページからなり、「序論」「本論」「校訂テキストと訳注」の 3 部を柱とし、末尾には「略号と参考文献」および VP 祭の祭場の図が付されている。

「序論」では、研究の目的や背景とともに、写本情報も含めた VādhŚS の研究史と新写本の意義について概観した後、同文献の文体的特徴、特に学派の位置づけや特徴を反映するマントラ（祭式で引用される種々の聖句集）の引用法を実例とともに紹介し、最後に VādhŚS 第 9 章（Vājapeya 章）が伝える VP 祭の式次第を概観する。

本論文の論考の中心をなす「本論」のうち第 I 章は、概ね VādhŚS の記述順序に従って、VP 祭における Vādhūla 学派の特徴的な儀軌の規定を描き出すものである。特に、潔斎、準備祭に続く本祭の日に行われる「戦車競走」「灌頂儀礼」「祭柱祭り」の 3 儀礼について、これらの実行順序や使用マントラの特徴を含めた他学派・他文献との詳細な比較検討を行っている。第 II 章では、VP 祭完了後の儀礼として全祭式文献の中で唯一 VādhŚS だけが詳細に伝える Pratyavarohañīya「戻り降り [儀礼]」（以下 Pratyav.）について、儀軌やマントラを詳述・分析すると同時に、その思想的背景をも解き明かそうと試みる。続く第 III 章は、VādhŚS および Baudhāyana-Śrautasūtra（VādhŚS と同様古層の祭式手順書）以外の（新層の）祭式手順書が、VP 祭完了後に Pratyav.ではなく Bṛhaspatīsaiva の名で呼ばれる儀礼（Bṛh.sava）を規定していることや、更に Pratyav.と Bṛh.sava とを同義に用いる（ように見える）例があることに着目し、VādhŚS の Pratyav.規定を Bṛh.sava の理解にとっても重要な新資料と位置づけ、改めて Bṛh.sava の性格やその Pratyav.との関係性について調査・考察を行うものである。

「校訂テキストと訳注」は、新写本に基づく VādhŚS VP 章の批判校訂テキストと日本語訳および脚注からなり、論文全体の約 4 分の 1 を占める。最初に VādhŚS 語写本における表記上（音韻上）の特徴を紹介した後、テキストの（概ね）1 文または 1 マントラごとに写本の異読情報を付した上で翻訳し、適宜儀礼内容を示す副題を掲げている。脚注には、語形の言語学的分析、引用マントラの関連情報、文化的・社会的背景などの解釈が盛り込まれており、その幾つかは本論の中で取り上げられ詳細に議論されている。

## 【論文審査の結果の要旨】

本論文の意義は、①1990年代に発見された新写本に基づく Vādhūla-Śrautasūtra (VādhŚS) 第9章全体の初の信頼に足る校訂研究を行った点、そして、②それによりまだ解明途上にある Vādhūla 学派の祭式的・思想的特徴を明らかにした点、の2点に集約される。

本論文の屋台骨となるのは、論文最後に位置する「校訂テキストと訳注」である。厳密な写本校訂と文献学的手続き、祭式的・言語学的知見に裏打ちされた正確な翻訳は、それ自体極めて質の高い基礎資料を提供するだけでなく、「本論」に展開される良質の議論を可能にしている。また訳注の多くは、当該テキストの批判校訂、並行箇所や関連マントラの情報と考察、二次文献を駆使しての語形やシンタクスの言語分析、前提や背景となる祭式や文化・社会についての考察など多岐にわたり、いずれも坪田氏の豊富な知識と優れた洞察力を示すに十分である。その幾つかが、今後独立した論考へと発展しうるレベルのものであることは間違いない。つまり「校訂テキストと訳注」は、本論文の議論の質と将来性を保証する基盤と位置づけられよう。

VP祭は多数の儀礼が組み合わさった複合祭式であり、独自儀礼以外の構成儀礼については各該当章を参照することを前提に、通常と異なる場合のみ9章で規定が修正・追加されている。そのため、「本論」第I章で取り上げられる規定と議論の殆は自ずと Vadh 学派特有のものになるが、それらに対する坪田氏の観察と分析は、前提となる基本儀礼の完全な理解の上でなされており、VādhŚS の規定の特性とその意義を存分に引き出すものと言える。例えば I-10 では、本祭屋に行われる主要3儀礼の戦車競走、灌頂、祭柱登りの順序・構成が他のあらゆる祭式手順書と異なっている様を見事に描き出し、I-11 では、戦車競走中のマントラとその使用時期・順序からその言語的特徴に至るまで、Vādhūla 派の特性を浮き彫りにしている。特に第II章では、VP祭終了後の Pratyavaroḥaṇīya (Pratyav)「戻り降り」が同派の独自性を際立たせる儀礼であることを、儀軌・思想の両面から解き明かす。まず坪田氏は、当儀礼の名の語源となった動詞 *prāti-āva-roh/ruh* が、「(誰かに) 対して降りる=敬意を示す」と「(天界から地上へ) 戻り降りる」の2つの意味で用いられ、一般に VP祭を行った者は誰に対しても降りる(頭を下げる)ことのない存在になることを確認する。その上で、多くの祭式手順書では Pratyavが、このいわば窮屈な状態を解除するための儀礼であるのに対し、VādhŚS のそれが、VP祭によって天界を獲得した祭主が天界から戻れなくなる(=地上で早死にする)のを防ぎ、再び「この世界にしかと立つ」ための儀礼であることを明らかにする。これに関して、同儀礼において段階的な天界上昇を示すマントラと、それに伴い椅子(玉座)の上に座った祭主が地面へ物理的に下降するという一見矛盾する両行為が、「上昇(天界獲得)と下降(天界からの帰還)両方の意味を込めている」または「高い地位(獲得した天界)を保持したまま、地上に帰還する」ことを示唆するとしたことは慧眼と言えよう。これらの論考は、Vādhūla 学派が全ヴェーダ学派の中でも、所属の大派閥である Taittiriya 派内部でも特異な位置を占めることを示しており、学派の地域性や学派間の関係を知る上でも大きな意義を持つ。

一方で、本論文に問題が無いわけではない。総じて議論が散漫であり、儀礼および議論の全貌が掴みにくいことや、重要な指摘がしばしば脚注で行われていることは、せっかくの秀逸な着眼点と考察とを時に埋もれさせている。また、VādhŚS が VP祭を全体としてどのような祭式的・思想的背景のもとで記述しているのかについての総合的な見解(結論)が無いことは惜しまれる。その他、前提となる各種儀礼や事象の多くに説明無く議論が進められたり、しばしばテキストと訳のみで解説や論考を欠くことは、読者にとって決して親切とは言えない。

しかしながら、以上の問題点はいずれも本論文の本質的な価値を貶めるものではない。残された課題の多くは、他の王権儀礼や他学派の見解の詳細な検討を待たなければ真の解決に至らないのも事実である。本論文が、上記①②のいずれの点においても優れた成果をもたらしており、それにより本論文がヴェーダ祭式研究に新たな局面を切り拓くであろうことは疑いを容れない。よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。